



ポイヤウンペの戦い ⑥

「金成マツ版 虎杖丸」から 文：瀧口夕美 絵：小笠原小夜

2人だけの結婚式

私、ポイヤウンペがかすみの小山をじっと見つめると、なんとそこには家の柱にしばられていたはずのニサッタスム姫がいた。美しい着物を身につけ、両肩からのびてかがやく虹が頭の上で交差している。黒い絹のような美しいかみや、朝日がのぼるようにまばゆく光る顔から、霊的な力が高いことも分かる。そして、姫はつき神に守られていた。あるものは姫のたましいを星の光でみなぎらせ、あるものはコウモリの群れのように姫のたましいの上を飛び交っている。

姫は私のかたわらにかしこまって座り、金の器にこぼれるほど入れたトノト（いのりの時のお酒）を、金のトゥキ（さかずき）とパスイ（いのりに使う細長いヘラ）とともに用意し、こうささやいた。「この大きなコタン（集落）にとって、あなたは敵です。これからの戦いで荒地になるでしょう。私は自分の村人をきり、あなたの刀できられて死にます。そのようにして死んだあと、良いたましいになって、あなたと結ばれることでしょ」

姫はさかずきを私に差し出し、続けた。「このトノトは、私が作りましたから、飲んでください。身よりのないあなたは、2人分、3人分も戦わねばなりません。あなたが行こうとしているニソルンサンタには人間の軍だけでなく、カムイの軍勢があり、国を守る魔人たちもうごめいています」

私は感心して、姫を静かにだき寄せた。「私もおまえと同じように思っている。いや、私から言わなくても、お見通しのだろう」。姫は声をしのばせてくすくす



笑い「みんな、私が柱にしばられていると思っているのです」といった。かわいいなと思って、頭をなで、顔にキスをした。「今後は、私の味方になってくれるとは本当にうれしい。おたがい死ぬまで愛し合って、いつまでもいっしょに暮らしたい。あなたもそう思ってください」。姫はなみだをこぼしていた。

このトノトはなんとおいしいのだろう。心臓までのびのびして、さわやかに生き返るようだ。私は口をつけたさかずきを姫にわたした。姫はさかずきのかげに頭をかがめ、うつむきながら受け取って、おいのりをしてから飲んだ。それは2人だけの結婚式のようだった。しばらく2人でおしゃべりした後、姫はどこかに飛んで行った。私がこの後どこで何をするようになるのか、姫には分かっていたのだ。

これまでの話は「まなぶんデジタル」=QRコード=で読めます

